中世遺跡におけるトイレ遺構の位置に関する考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2938

「中世遺跡におけるトイレ遺構の位置に関する考察」

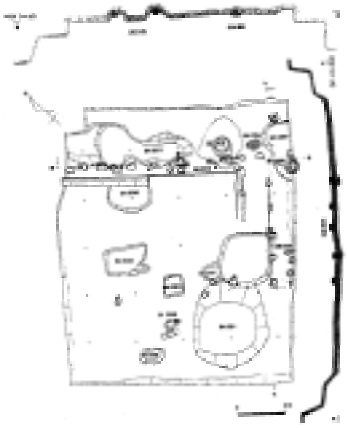
佐藤 高士

都市の中におけるトイレの成立は中世後期とされており、現在と異なり建物外に存在するトイレにはその配置に意味があったであろうと考え、中世の集落遺跡の中におけるトイレ

遺構の配置ということに着眼して分析、考察を行った。

分析は遺跡の発掘報告書や遺構図に基づき、トイレ遺構が他の遺構とどのような位置関係にあるかを読み取った。分析の対象とした遺跡は一乗谷朝倉氏遺跡と、妙楽寺遺跡、堺環濠都市遺跡で、ほぼ同時期の３遺跡である。トイレ遺構を他の遺構との位置関係により建物裏、道路沿いといったように分類を行った。その結果、遺跡によってトイレが配置される位置の傾向に違いがあるということがわかった。

その結果を基に衛生面、糞尿利用、景観といった点でそれぞれの遺跡を比較しながら考察を行った。遺跡により配置場所の割合が違うということから、それぞれ優れていたであろう点や積極性があったであろう点を考察することができた。



堺環濠都市遺跡 SKT60 地点